

令和 6 年 4 月 13 日現在

機関番号：43804

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13058

研究課題名（和文）琉球における漢文訓読に関する研究

研究課題名（英文）Research on Kanbun Kundoku in Ryukyu

研究代表者

中野 直樹（Nakano, Naoki）

常葉大学短期大学部・日本語日本文学科・講師

研究者番号：00828650

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世琉球において行われていた漢文訓読について、『四書體註』を主な資料として考察した。同時期の日本の漢籍に加えられた訓点と、琉球の『四書體註』を比較した結果、近世琉球においては同時期の日本の訓読に影響を受けつつも、独自の訓読を行っていたことが明らかとなった。これまで、近世琉球では日本の文之玄昌の訓点である「文之点」で漢籍が読まれていたと考えられてきたが、それが必ずしも当てはまらないことを指摘した。また、近世琉球・近代沖縄で流通していた字書についても考察を行い、これまでに目録等で報告されていない字書が当地に流通していた可能性をはじめめて指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世期の日本では、様々な人物が自らの主張とともに訓法を展開している。同時期の琉球では、漢文訓読において使用する訓法が当初の文之点から別の訓法に交代している。それには、おそらく琉球において日本とは異なった学習システムがあったことや、日本には無かった科挙の存在の影響があったことは先行研究の指摘にあった通りである。近世後半には琉球に独自の訓法が存在していたと考えられるという点については、東アジアの訓読現象を論ずるうえで今後見逃せない。琉球も漢文訓読圏に加えることはもちろんのこと、日本の訓法に追随し続けていたわけではなく独自性があり得たことは、言語学的にもさらに考える必要がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the practice of Classical Chinese text reading in early modern Ryukyu, focusing on the "Shishotaichu" as the main source material. By comparing the annotation practices in contemporaneous Japanese texts and Ryukyuan "Shisodaizhu," we revealed that while Ryukyu was influenced by concurrent Japanese reading practices, it also developed its own unique reading methods. It was previously believed that Classical Chinese texts in early modern Ryukyu were read using the "Bun-no-Ten" annotation system derived from Japan's Bun-no-Gensho. However, our study points out that this assumption does not always hold true. Additionally, we analyzed the dictionaries circulating in early modern Ryukyu and modern Okinawa, suggesting the possibility of previously unreported dictionaries being in circulation in these regions.

研究分野：日本語学

キーワード：漢文訓読 訓法 文之点 琉球 増続大広益会玉篇大全

1. 研究開始当初の背景

近世期の日本における漢文(特に四書五経)の訓法は、儒者によって様々なものが提唱されていたことが指摘されている(例えば、文之玄昌の文之点、林羅山の羅山点、山崎闇斎の嘉点、佐藤一斎の一斎点など、十五家以上の訓法があった(斎藤(2011)・石川(2015)等参照)。一方、琉球への四書五経の伝播は、文之玄昌の門人である泊如竹によって近世に初めてなされ、そこに用いられた訓法は、文之玄昌が提唱する文之点であったと言われる。これは、泊如竹の来琉の事実と土佐への漂流民照屋里之子の証言が根拠になっている。

ところが、琉球にて加點された典籍の訓法を実際に調査した、水上(2014・2015)によれば、そこに用いられた訓法は文之点とは合わないという。以下に、水上(2015)の例を引用する(引用に際して本文を読み下した。()は補読、[]は不読を示す)。

- ・『周易伝義』《文之点》
故二此ノ卦ヲ筮シ得テ而シテ六爻皆不変ナル者ニ於(イ)テ

- ・『周易大全会解』《琉球楚南家本(訓法不明)》
故(ニ)此(ノ)卦(ヲ)筮シテ得テ[而]六爻皆変(ヲ)不ル者(ニ)於(イテ)ハ

上記二つの資料の訓読は、些細な差しかないように見えるが、近世当時にあつては漢文の本文を音読するかどうか(上記例でいえば「不変」)、不読にするかどうか(上記例でいえば「而」)などが議論され、この程度の読みの差であっても重要な関心事になった。その事實はさておき、ここで重要なのはこれまでの琉球での漢文訓読に関する指摘と実際の訓法が異なっているということである。先行研究においては、水上氏だけが琉球における漢文訓読は、少なくとも『周易』関係の典籍において、文之点が用いられていないということを指摘した。

しかし、その他の典籍の訓法がどうなっていたのかということや、なぜ文之点で漢文が読まれていないのかなどの疑問は残されている。また、当時の琉球はあらゆる面で強く日本の影響を受けている一方で、清朝の影響も受けているという複雑な土地であった。漢文訓読に関することであれば、本邦から訓法を輸入しつつ、清朝の影響によって科擧が実施されていたことなどはその一例である。このような日本と琉球との学習環境の違いも考慮に入れつつ、琉球での訓読の実態の解明が望まれる。

2. 研究の目的

近世期における漢文訓読の史的変遷については、日本の資料だけでかなりの部分を明らかにすることが可能ではある。しかしながら、日本と同じく漢文文化圏を形成する近隣の琉球の訓読と併せて考察することで、近世期における漢文訓読のバリエーションの実態が見えてくる。本研究ではその点を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、当初以下の四つの問いに対してそれぞれ研究の方法を設定した。

琉球における漢文は、文之点で読まれた形跡が文献上に全く確認できないのか。

申請者が各地の所蔵機関を訪問して、未公開の琉球に関する訓点資料を実見し、現存資料から文之点の有無を確認する。

照屋里之子による琉球では文之点を使用されているとした証言は何を意味するか。

訓点が加点された資料だけでなく、日記類の記述を見直し時代背景や学習環境の変遷など、文化史の観点から二つの証言がなぜ行われたのかを考察する。

琉球における訓法には参考書等があったのか。また科試(科挙)との関係はあるのか。

琉球の科の内容および使用された参考書については、高津(2014)・水上(2014・2015)等に詳しい。それらを参照しつつ、科に用いられた参考書の読みの指示と訓法を比較し、参考書類が訓法に及ぼした影響を明らかにする。

文之点が琉球で使用されていないなら、それはどのような訓点か。

日本に残された諸家の訓点資料と、琉球の訓点資料を比較し、琉球の訓法は日本のどの訓法に近いのかを明らかにする。本邦のいずれの訓法にも合わない場合は、琉球の漢文の訓法にはどういった読みの傾向がある訓法となっているのかを指摘し、琉球における漢文訓読の独自性を明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題による成果は以下の通り(上記四つの問いに対応させる)。

琉球における漢文は、文之点で読まれた形跡が文献上に全く確認できないのか。

今回の調査では見つけられなかった。ただし、高津・榮野川(2005; 19)には、おそらく文之点が加点されているであろう資料が報告されている。したがって、文之点が琉球で使用されていたこと自体は否定されることではない。

照屋里之子による琉球では文之点を使用されているとした証言は何を意味するか。

琉球に文之点を伝えたと言われる泊如竹が来琉したのは、寛永9年(1632)であった。如竹が来琉してすぐは琉球で文之点を使用されていたと考え、照屋の証言は十八世紀中ごろに成立した『大島筆記』に記録されているから、約100年間は琉球で文之点が流通していたと見ることができる。一方で、今回調査できた文之点以外の訓点が用いられている訓点資料のうち、年紀が最も古いものとして道光17年(1837)のものがある。これによれば、少なくとも十九世紀初期には文之点以外の訓点も琉球に流通していたことになる。照屋の証言は、琉球で各訓点の流通時期をおおよそ教えてくれる。今回は残念ながら、この証言と同じような訓法等に関する記述を持つ日記や聞書類を新たに見つけることはできなかった。

琉球における訓法には参考書等があったのか。また科試(科挙)との関係はあるのか。

琉球人が訓点を加える際に参考書があるか否かについては、それらしい資料は発見できなかった。ただし、琉球で加点された訓点資料を見てみると、互によく似た訓法で訓読した形跡があるので、訓点資料同士の移点はおそらく行われていたであろうと考えられる。

琉球では、科試(科挙)が行われていたが、句読点等の加点が求められることがあった。これについては、部分的に本文を抜き出して加点の訓練を行ったような書き込みがいくつかの資料に見られる。琉球の科試の対策には『四書體註』という資料が重用されたが、利用方法は様々であったらしく、本文には句読点等を直接書き込まないものもある一方で、水上氏が報告した楚南家旧蔵の『四書體註』には句読点等が数多く書き込まれている。

以上については、中野直樹(2022)「琉球における漢文訓読の実態 琉球版『論語集註』による」『訓点語と訓点資料』(149)、中野直樹(2022)「琉球の科試関連資料 東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ」『汲古』(82)を参照。

文之点が琉球で使用されていないなら、それはどのような訓点か。

文之点は琉球で加点された訓点資料を見る限り使われておらず、近世の日本の訓法とは異なる訓法が琉球で流通していた可能性が高い。琉球の訓点資料の成立時期から見て、少なくとも十九世紀初期頃以降琉球において、ある程度定まった独自の訓法が共有されていたものと考えられる。ただし、琉球の訓法は、全くの新発想による読みをしているわけではなく、近世期の日本の訓法と同じ読みをする部分も珍しくない。ここから判断すると、琉球で流通した文之点以外の訓法は、日本のいずれかの訓法が元になっている可能性がある。

以上については、中野直樹(2022)「琉球における漢文訓読の実態 琉球版『論語集註』による」『訓点語と訓点資料』(149)を参照。

[参考文献]

- 石川洋子(2015)『近世における論語の訓読に関する研究』新典社
斎藤文俊(2011)『漢文訓読と近代日本語の形成』勉誠出版
高津孝・榮野川敦(2005)『増補琉球関係漢籍目録：近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての総合的研究：研究成果報告書別冊』斯文堂
高津孝(2014)「琉球における書物受容と教養」島村幸一編『琉球：交叉する歴史と文化』勉誠出版
水上雅晴(2014)「琉球地方士人漢籍学習の実態：書き入れに着目した考察」『琉球大学教育学部研究紀要』(84)琉球大学教育学部
水上雅晴(2015)「琉球中央士族の漢籍学習について：楚南家本を中心とする初歩的考察」『沖縄文化研究』(41)法政大学沖縄文化研究所

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 38
2. 論文標題 近代沖縄における字書利用の一例－北谷町教育委員会文化課蔵『四書體註』による－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 常葉国文	6. 最初と最後の頁 27 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 149
2. 論文標題 琉球における漢文訓読の実態 琉球版『論語集注』による	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 82 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 82
2. 論文標題 琉球の科試関連資料 東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 31 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 37
2. 論文標題 東洋文庫内岩崎文庫蔵琉球版『論語集注』影印（一部）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 常葉国文	6. 最初と最後の頁 39 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 2
2. 論文標題 香川大学神原文庫蔵大魁本『論語集註』（寛永二年刊）影印 書誌	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 草薙論叢	6. 最初と最後の頁 76 134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野直樹	4. 巻 1
2. 論文標題 香川大学神原文庫蔵大魁本『論語集註』（寛永二年刊）影印 文之点の紹介	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 草薙論叢	6. 最初と最後の頁 66 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中野直樹
2. 発表標題 近世琉球の漢文訓読
3. 学会等名 口訣学会夏季学術大会（韓国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中野直樹
2. 発表標題 琉球における漢文訓読について－琉球大学附属図書館『論語集註』訓点の検討－
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------